

# 音楽教育のあるべき姿

北海道師範塾「教師の道」  
副塾頭 小山内 仁  
(北斗市立石別中学校教頭)

## 1. はじめに

教育の実際はどの部門もそうですが、中でも音楽教育ほど教師その人によってきまる教科はない。

「すぐれた音楽教育のあるところ、必ずすぐれた音楽教師がいる」故浜野政雄氏(1915-2007)東京芸術大学名誉教授の言葉である。

素晴らしい音楽教師がどこかに転任すると、そこには必ず素晴らしい音楽教育の花が咲きはじめる。このことはきっと音楽教育というものの本質によるものであろう。

教育とは、教師と子どもが教育内容を通して結ばれるところに生まれると言われるが、音楽教育の場合、教育内容は「音楽」という芸術であるため、その結びつきが単なる言語の理解を越えた人間の奥深いところで行われるからだろう。

したがって、音楽の教師は音楽を単に技術的にではなく芸術として捉えているばかりでなく、学習する側の子どもの本質を理解している必要がある。

## 2. 音楽科教育の存在理由

マーセルは、その著書『音楽教育と人間形成』の中で、なぜ音楽を学校で教える必要があるのかという問題に対して、次のように答えている。半世紀も前の出版物であるが、そこには古くて新しい示唆と助言が含まれている。

- (1) 音楽は、人間が共有する文化の重要な要素である。  
歴史的に、主としてキリスト教的文化に与えた影響と、今日の文化になお及んでいる事実である音楽にあずかる権利をすべての人が持っている。
- (2) 多数の人が音楽から多くの楽しみを得ている事実。  
音楽経験や活動は、精神を強くし、倫理性を高め、全生活を生きがいのあるものにする。
- (3) 知能の発達と人格の成長をうながす原動力となる。  
うたう、ひくなどの活動する能力は、豊かな自己表現につながり、音楽の知的な学習面では、音楽以外の事柄に対する興味が拡大する。
- (4) 余韻の増大に伴う音楽の有効性。  
教育の責任として、レクリエーション活動への位置づけ。
- (5) 音楽の学習は感情経験である。  
すべての感覚媒体の中で、音がいちばん感情と深い関係を持っている。音楽は、その感情的な力のために、人の心に強く訴えかけ、人間生活の原動力となる。またそれに通じて行われる教育は、偉大な人間の感情に触れることである。

その他、具体的な学習領域としての表現と鑑賞の関係、音楽の趣味の向上についても言及している。

さらに、マーセルは M. グレーンとの共著『音楽教育心理学』において、学校における音楽の教育的価値を別の表現で4つ挙げている。

次の4つである。

- ① 経験の発展的再建である。
- ② 訓育としての価値を持つ。
- ③ より充実した生活に関して企画性を持つ。
- ④ 創造的な民主主義の育成に貢献する。

以上のことから、音楽科教育の意義は、「音楽がわかることの楽しさ」「できることの楽しさ」「音楽との新鮮な出会いから生まれる楽しさ」など、学校であるからこそ得られる音楽の感動体験を通して、音楽活動の喜びを与えるとともに、生涯にわたって音楽に親しむ子どもを育成することである。同時にこのことが音楽科教育の原点である。これらの体験は、私たち音楽科教師の願い「生涯にわたって音楽を愛好していく心情」とともに、現在学校教育が目指している「生きる力」の基盤となっていくものである。

### 3. 教育成立の最初の条件

教育の効果は元来、指導方法や指導技術の上手、下手や経験の多少だけではなく、子どもと先生の心の通い合いから生まれる。

ベートーヴェンの書簡集の中に、“音楽は心より発す、再び心に到らん事を”と書かれたのがあるが、音楽を、教育と置き換えればそのまま教育の仕事の祈りに通ずるだけでなく、あらゆることに共通する真理のように思われる。だからこそ、心から発するということが大切なのである。

今日、今、貧しい事を悲しむことより明日も又貧しいことをこそ憂えなければならない。このような祈りの心で教育に当たれば、子どもの心にいつしか感動の触発による“共鳴現象”が生まれることを確信したいものである。

この共鳴現象について、面白い例を紹介する。

鉄片で作られているビブラフォーンは、固いマレットで打てば固い音がするし、柔らかいマレットで打てば柔らかく反応する。ところが、マレットで打たなくても、例えばペダルを踏んだままでアルトリコーダーで「ラ」の音を鳴らすとビブラフォーンのあの固い鉄片のラの鍵盤も「ワ〜〜〜ン」と共鳴するのである。鉄片すら共鳴して振動を生むのに、先生と子どもという人間同志に共鳴が生まれぬ筈がない。お互いにペダルを踏んで心の抑圧や壁を取りはずし、共鳴し合える状態を先ず作って共鳴しながらさまざまな調べを奏で続けて行きたいものである。

また、下手ながら子どもに笛を吹いて聴かせたり、一緒に練習をしている子どもは、とても音楽を好み、楽譜を欲しがり、上手に笛を吹いたものだが、子どもだけに笛を吹かせ、先生は理屈や説明ばかりしている子どもはその逆になる。このようなことを考え合わせてみると、子どもに共鳴現象を望むなら、まず教師が、共鳴できる周波数の振動を起こさなければ何かが始まることはあり得ないのである。

### 4. 教師の祈りは“突る”こと

昔、恩師がこんな話をしてくれた。

「私はクラスの子どもたちと朝逢ってから帰るまでの間に皆同じくらいずつ一人一人と話がしたい。しかし、うっかりすると何人かの子どもは一日中何も話さずに帰ってしまうことがある。そこで私はこうすることにした。眠りに入る前、目を閉じて、今日話すひまのなかった子どもを脛の裏に呼び寄せて話すんだ。“すまなかったナ。元気がなかったがどうしたんだ、”…その他いろいろとね。そうするうちにいつしか眠ってしまう。

翌日、それらの子どもたちの瞳と出逢った時、昨夜話したことがすっかり通じているように感じられるのだ」と。

一人一人の子どもと心を通じたいといつも思い続けている恩師の心が、思いが、そんな

形でも通じる結果になっているのである。

私たち教師の祈りの内容とは、

- ①子どものことや教える内容や方法などを、いつも思い続けること。
- ②可能性を信じて語り合い、言い続けること。
- ③子どもにだけ要求するのではなく、自らも行い続けること。

の3つに要約することができる。そうすれば、思い続けたことが実る、言い続けたことが実る、行い続けたことが実る、という因果関係が必ず生じる。

## 5. 音楽教育の全体構造—音楽教師百姓論—

音楽の指導内容や教材の精選，あるいは効果的な指導方法の工夫研究，また，教師がどのような役割を果たし得るか，留意点は何か，などを明確にするためには，音楽教育がどんな姿（構造）になっているかをはっきり知ることが大切である。

音楽教育は，生きて生成発展する生命体として捉えなければならない。音楽教育のあるべき姿としての全体構造を，可能性を持ったタネに根を張らせ，芽を吹かせ，幹や枝葉を茂らせて花を咲かせ，実をむすばせるための，ちょうど，祈りを込めて作物を育てる農夫（百姓）の仕事と役目を，音楽教師の役割に見立てて論じる。

### (1) 基礎感覚段階

無限の可能性を秘めた子どもたち（個性的な種）が，学校教育（発芽する場所である大地）という環境に置かれる。

やがてこの環境の中で子どもたちは，本来的に持っている生命活動を開始し，根がのびていく。この根を素朴な音楽的感覚という観点から，①リズム感，②音程感，③ハーモニー感の3つに分析する。

そして，この3つの感覚（根）を十分に養い育てることが音楽教師の最初の重要な仕事でなければならない。

### (2) 基礎技能段階

これらの根（感覚）の発育に刺激されてさらに多くの根が伸びる。将来の大きな幹を支え育むのに十分なこれらの根は，音楽的な技能という観点から，④身体表現力，例えば楽器を演奏する力とか，歌を歌う，リズムに乗った動作ができるなどの技能，⑤聴取力，例えばアクセントを感じて拍子を聴き取る力とか，まとまりのあるフレーズを正しく聴き取る力，音色の特徴などを聴き取る力など，そして⑥読譜力，⑦記譜力の4つの技能である。

表面では見えないこうした地味な地中の生命活動を健全に育成することによってのみ地表の安定した幹や葉，花を期待することが可能になる。

このAの基礎的な感覚と，Bの基礎的な技能を総称して「基礎」と呼ぶことができる。

さて，AやBの活動を進めて行く中で，いろいろな約束事をまとめてみる必要が生じる。これは，⑧知識的な理解事項，例えば「楽典」などの事項になる。このような楽典事項なので，ちょうどAとBの接点に位置することができる。従って，楽典を教えるから活動させるという順序より，むしろいろいろな活動から導きだされたものをまとめた結果が楽典事項になるという指導形態が本来的なあり方ではないかと思うのである。

### (3) 活動段階

十分に育成された根の生命活動によってここに新しい芽が萌え，幹が太り，青々と葉が茂る。この繁茂は正しく大地に根差した“生きた美”として成長し続けるが，どの部分も皆，一つの生命の根元から発しているもので，それぞれが独自の営みをしながら

らも、深い関連を持ちながら特徴のある活動が続けられるのである。

具体的な活動の形を分析してみると、⑨歌を歌う、合唱するなどの活動、⑩楽器を演奏する、合奏するなどの活動、⑪イメージを音楽として表現する活動（創作活動）、⑫鑑賞活動、などに分けることができる。⑨⑩⑪の活動を学習指導要領では“表現”とまとめて呼ぶようになっている。

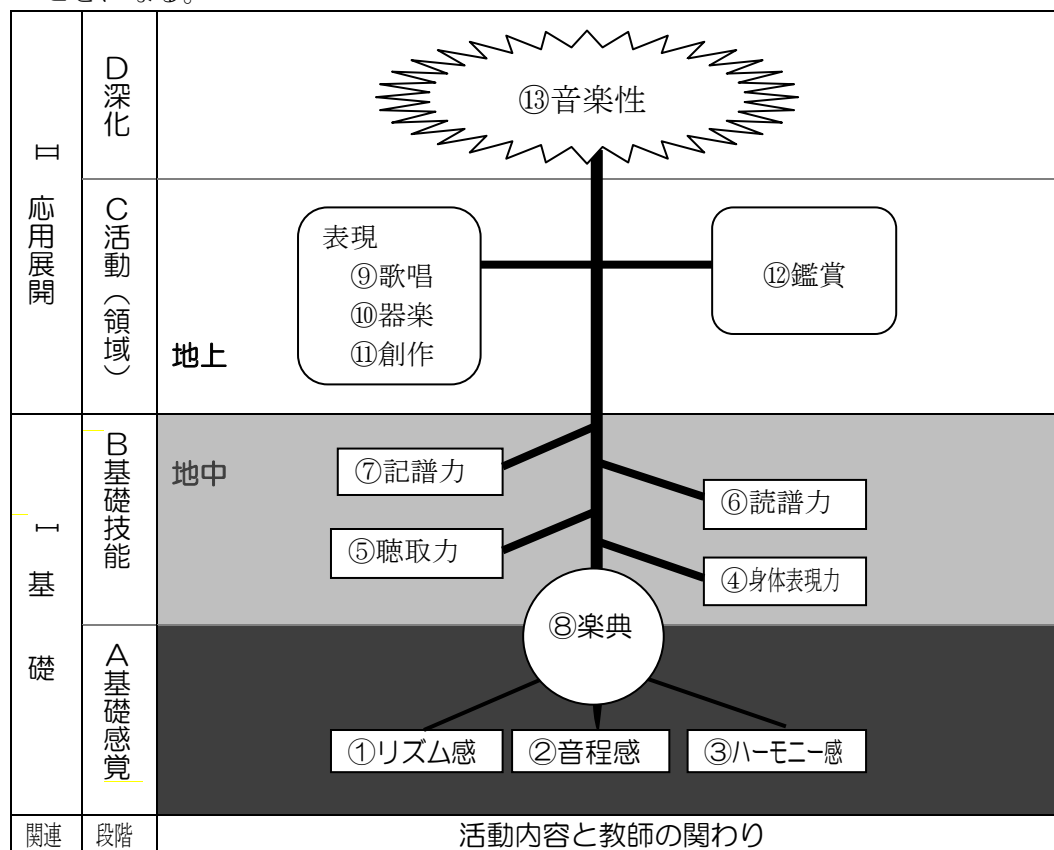
もし、茎の根本から切り取って飾り物の生け花にしたとすれば、いくら葉の手入れをしても青々と艶を増したり、やがて花が咲くなどということは考えられない。

#### (4) 深化段階

今まで述べてきた地中における根の活動が充実しれければ、やがて美しい花が開くことになる。この花を私たちは“音楽性”と呼ぶ。子どもたちのあらゆる活動が彼らの人格に集約されて音楽性を深める段階であると見なすことができる。

神秘的な生命体のあらわれとしてのこの花は、また、私たちの心に慰めや安らぎ、喜びなどの感動を与えてくれる。

やがてこの花は生命のもととなる実を結び、進歩しながら再び循環のルールに乗ることになる。



以上のように音楽教育を生きものとしてとらえ、全体構造の分析をした。

音楽教育は単に、“音楽を教える”だけでなく、“音楽で教育をする”という音楽教育のあるべき姿に立って、今後も工夫研究を続けるようにしたいものである。

#### 参考文献

J. L. マーセル、美田節子訳『音楽教育と人間形成』（音楽之友社：1967）

J. L. マーセル・M. グレーン、供田武嘉津訳『音楽教育心理学』（音楽之友社：1965）